

“攻める”オトナの教養マガジン・特集1 いま問われるメディアリテラシー

FJ

500円 12

2011 December No.085
フィナンシャル ジャパン

● 特集2
『ちはやふる』
ボクらと伝統文化を
つなげる
“文系スポーツ”

● インタビュー
浅香守生 (アニメーション監督)
ピーター・A・マックミラン (杏林大学客員教授)



永世クイーンが語る
競技かるたの魅力

● 特集1

いま問われる

メディアリテラシー

Media Literacy

インタビュー / 藤代裕之 (ジャーナリスト)

新聞読み比べ 政治&経済

「このつぶやきって訴えられちゃう？」

プロが教える情報整理
ウィキリークスの功罪



● ほんものがたり
川上未映子 作家

● インタビュー
ジョン・キム
(慶應義塾大学大学院 准教授)

● 注目のヒト
SUPER☆GiRLS
荒井玲良 × 田中美麗

● FJリーダーズクラブ
内藤忍 (クレディ・スイス証券)
内藤忍さんに聞く

「投資を始めるにあたって何をすべきですか？」

● うめけん対談
経沢香保子
トレンダーズ社長

Bookmark

政府や企業に求められる組織づくりとは

—— ウィキリークスやフェイスブックなどが発端となった革命で大きな変化が起きています。

北アフリカのジャスミン革命、アノニマスによるソニーへのサイバー攻撃などを経た今、政府や大企業といった既存の権威に危機感が生まれています。権威を支えてきたのは独占と隠ぺいによって生じていた情報の非対称性。国民より政府が、従業員より経営側が、学校でいえば生徒より教員が情報を多く持っていて、権威を権威たらしめていた。

しかしネットやソーシャルメディアの働きで市民が情報を持つようになり、非対称性がなくなってきた。こうした（情報がネットを通じて一気に広がり、デモなどの行動につながる）動きは専制国家に限ったことではなく、民主主義の国においても起きますし、政府にとって常にプラスに働くわけでもありません。

その象徴が「逆パノプティコン」という言葉です。情報は自由であるという信条を持つウィキリークスが目指すのが「完全透明化社会」、非対称性のない社会です。情報を持つようになる市民側が強くなる中で、政府や企業が取るべき選択肢は2つあります。1つはさらに秘密主義に走る方法。情報を出さないし共有もしません。もう1つは、「この流れは止められない」と考え、出せる情報はすべて出す、情報開示をデフォルトにした組織づくりです。注意しなければならぬのは、ネットがあつて情報開示が進んだからといって、議論がしつかり進み、実りのある結論につながる保証はないということ。アラブのいくつかの国で革命は起きましたが、それで誕生する政権が以前の独裁政権に比べ、民主主義的かという点、現段階では何とも言えないのも事実です。選挙を経てイスラム原理主義が政権を取る可能性さえある。それは西洋の民主主義国家からすると、民主的とは思えない方向に進んだことになりました。ただし、一つ確かなのは圧政、腐敗に対するモニタリング機能は働くようになるので、政権や権力側に自己規律するインセンティブは以前より増すとはいえるでしょう。

敗に対するモニタリング機能は働くようになるので、政権や権力側に自己規律するインセンティブは以前より増すとはいえるでしょう。

論空間としてのソーシャルメディアの可能性が現実化している。社会性を意識した使われ方もされている、議論の内容もまともなものが多いようです。こうなつた理由は、例えば原発対応問題で、国民の間で、政府や東電に対する不信が高まる中、既存のメディアがそれに十分応えなかつたことがあります。それに対し、ソーシャルメディアは速報性があるだけでなく、既存メディアが出さない情報を出し、共有し、さらにそれを検証する機能も果たした。

一方、日本でのソーシャルメディアの評価はこれまでそれほど高くなかつたのですが、3・11以降、その認識が変わりました。以前は、ソーシャルメディアはあくまで日常のエンターテインメント、コミュニケーションの手段として使われるのみで、政策議論の場、言論空間ではありませんでした。しかし3・11以降、言

ただ真偽の確認は難しいです。だからこそ、ソーシャルメディアに限らず、その他のマスメディア、識者を含めた検証、役割分担や連携が重要です。ウィキリークスも、扱う情報量が膨大になつて既存の大手メディアと連携するようになりまして、大手メディアが情報を精査して、重要と判断したものについてアジェ

著者インタビュー ジョン・キム 慶應義塾大学大学院准教授

情報の完全透明化社会への流れを止めることは誰にもできない

ソーシャルメディア隆盛の時代、情報は次々に私たちの目や耳に届く。ウィキリークスやフェイスブックが発端となって革命が起きたことの意味とは何か。私たちは情報とどう向き合えばいいのか。

構成・濱田 優 写真・鰐部春雄



「ジョン・キムのハーバード講義 逆パノプティコン社会の到来」

ジョン・キム / ディスカヴァー・トゥエンティワン / 1050円(税込)

監獄の中心にある看守塔を囲む形で円形に独房があり、そこに囚人を収容する「パノプティコン(全展望監視システム)」。キム准教授は「逆パノプティコン」社会の到来を指摘する。逆とは市民が看守塔から政府を監視するという意味だ。現状を整理し未来を見据えるために読んでおきたい1冊。

ンダセティングングをして報じている。日本では従来、政府が出す情報が正しいというのが常識とされてきたが、価値観や利害が違えば、真実に対する見方、スタンスも異なつてきます。例えば、アメリカでは、ある政策問題に対して民主党と共和党が提示する見方は大きく異なります。要は、権力闘争の結果で生まれた社会的真実を、一つの絶対的な存在があたかも普遍的な真実のように提示する時代は過ぎたということ。提示された事実や情報に対して、様々な観点から様々な意見が提示され、議論される。そのすべてのプロセスがソーシャルメディアなどによって透明になつていく。結果、最終的にどれを信頼するかは国民一人ひとりが決める。予定調和的な秩序や調和はないかもしれませんが、多様でかつ主体的な判断にすべてが委ねられる時代が到来したと言えます。

日本の失われた20年を生み出した根源的な要因は、国民一人ひとりの当事者意識の欠如、責任感の欠如です。しかし、これからは自助の時代、自己責任の時代。その手助けとなるツールとしてソーシャルメディアの可能性は小さくないと思います。

—— プライバシーの問題は？

世代間で少しスタンスの差があるように思われます。40〜50代がプライバシー保護にセンチティブであるのに対し、若者は相対的に開示に対する抵抗が少なくていいです。SNSなどを日常的に使っているからでしょう。特に若者には自分のプライバシー情報を出すことで便利さを得られるからそれでいいと合理的に考える人が増えていきます。いずれにせよ、情報開示が引き起こす様々なリスクを回避するためにも、自ら発信する情報が社会でどう使われるかを想像する力が求められています。

John KIM
1973年韓国生まれ。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科准教授、ハーバード大学法科大学院客員教授。英オックスフォード大学上席研究員などを歴任。内閣官房、経済産業省、総務省、文化庁などの政府委員会の民間委員なども務めた。 @kimkeio

編集長・濱田の「これ読んでいい！」



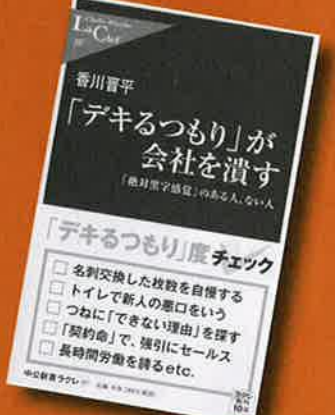
「だからテレビに嫌われる」
堀江貴文・上杉隆 / 大和書房 / 1365円(税込)

自由報道協会の暫定代表を務めるジャーナリスト上杉隆氏と、取巻直前の堀江貴文氏というテレビに嫌われた2人が11時間にわたって行った対談。東日本大震災・原発問題後のテレビ報道の問題点から放送利権に対する批判まで。過剰規制を求める社会に対する思いも。



「いつか、菜の花畑で」
〜東日本大震災をわすれない〜
みすあき / 扶桑社 / 1000円(税込)

震災の被災者に思いをこめて描いた漫画をブログで発表、Twitterを中心にネットで一気に広まり、編集者の目に留まって書籍化された。色は塗られておらず線も荒いが、かえって胸を詰まらせる。印税は被災地に寄付されるという。



「できるつもり」が会社を潰す
「絶対黒字感覚」のある人、ない人
香川晋平 / 中央公論新社 / 819円(税込)

「高いつもりで低いのは会社への貢献」「低いつもりで高いのは自分の給与」。ギクッしませんか？ 給与が上がらないと嘆き、会社の愚痴をこぼす前に、本書を読み「絶対黒字感覚」をつけては？ 著者は成長ベンチャーの会計顧問などを務める公認会計士・税理士。